

# 懐ろ鏡ふとこかがみ

野村胡堂

—

「親分、面白い話があるんだが——」

八五郎のガラツ八が、長んがい顎あごを撫でながら入って来たのは、正月の十二日。屠蘇とそ機嫌きげんから醒さめて、商人も御用聞も、仕事に対する熱心を取り戻した頃でした。

「しばらく顔を見せなかつたじゃないか。どこを漁あさって歩いてたんだ」

銭形の平次は縁側から応えました。湯のような南陽みなみにひたりながら、どこかの飼うい鶯ぐいすらしい囀さえずりを聴いていたのです。

凝じつとしてしていると、梅の香が流れて、遠くの方から、時々ポン、ポンと忘れ

たような鼓つづみの音が聴えて来るといった昼下りの風情は、平次の神経をすつかり和なごめていたのでしよう。

「親分、憚はばかりながら、今日は申し分のない御用始めだ。野良犬が掃き溜めを漁るように言つて貰いたくねえ」

「大層なことを言うぜ。どこでお屠蘇の残りにありついたらんだ」

平次はまだ茶かし加減でした。こう紫に棚引く煙草けむりの烟を眺めて、考えごとをするでもなく、春の光にひたりきっている姿は、江戸開府以来の捕物の名人というよりは、暮しの苦勞も知らずに、雑俳ざっばいの一つも捻ねっている、若隱居わかしんごという穏やかな姿でした。

「親分、神楽坂の浪人者殺し、あの話をまだ聴かずにいるんですか」

「聴いたよ、——が、二本差りゃんこと鉄砲汁は親の遺言もちで用いないことにしてある」

「へッ、こいつはたまらねえ御用始めですぜ。親の遺言はしばらく鉄砲汁の方

だけにしちやどうです」

ガラツ八はいつの間にやら、日向一パイに塞がって、お先煙草を立てつづけに燻くゆらしているのです。

「ことと次第じゃね、——話して見な、どんな筋なんだ」

暮からあぶれている平次は、まんざらでもない様子です。全く松のうちから江戸中を駆けずり廻って、親分のために素晴らしい御用を嗅ぎ出そうとしていた、ガラツ八の心意気知らないわけではなかったのです。

「ね、親分。幽霊が人を殺すでしようか」

「何を下らねえ」

「生霊、死霊てえ話は聴いたが、足のねえ幽霊が、後ろから脇差で人を殺すなんてことがあるでしようか」

「馬鹿も休み休み言うがいい。そんな物騒なエテ物が、箱根の此方にいてたま

るものか」

平次は頭からけなしつけますが、その癖ガラツ八の話に、充分過ぎるほどの興味を動かした様子でした。

「本当ですよ親分。川波勝弥かわなみかつやって年は若いが、恐ろしくヤットウのうまいのが、神楽坂で芋いものように刺されているんですぜ。側には川波勝弥を怨んで死んだ娘の、懐ろ鏡が落ちて割れているなんぞ、そっくり怪談ものじゃありませんか」

「なる程、そいつは面白そうだ。最初から筋を通して見な」

平次は大分乗気になりました。

「こうですよ、親分」

ガラツ八は吐月峰はいづきをやけに引っ叩くと、煙管を引いて物語らんの構えになります。

牛込肴町さかなに町道場を開いている、中条流の使い手柴田弾右衛門、一年前から軽い中風に罹かかって、起居も不自由ですが、門弟たちが感心に離散しなかつたので、この正月も、恒例の十一日に稽古始めを行い、鏡餅を開いて深夜まで吞みました。

門弟と言っても、筋の良いのは一人もありません。柴田弾右衛門は恐ろしく気楽な男で、門弟の身分などに選り好みを言わなかつたのと、百姓町人と雖いえども、身のたしなみに一応の武技は心得ておくべきであるという建前で、門人の半分以上は町の若い者たちに、無禄の浪人ども、それにほんの少数の裕福でない御家人の子弟が交まじっているという程度のものでした。

門弟の中で、川波勝弥と林彦三郎は抜群の使い手で、この二人が柴田弾右衛

門に代つて稽古をつけてやっております。勝弥は二十八、彦三郎は二十六、どちらも浪人で、どちらも元気者で、その外には、町人側に大工の杵次まさじ、植木屋の五助、御家人の子の岸松太郎、大原幸内などは、いずれも若くて腕っ節の良いところでした。

柴田弾右衛門には娘が二人、姉をお類と言つて二十三、妹をお半と言つて二十歳。どちらも美しく生い立つて、門弟たちの魅力になつていましたが、姉のお類は去年の秋、仔細は解らず、武家の娘らしく懐剣で自害して相果てました。高弟の川波勝弥と娶め合あわせてこの道場を継がせるつもりだったのが、柴田弾右衛門が廃人同様になつて、道場の前途がはなはだ心細くなつた上、川波勝弥が近頃望まれて、さる大身の養子になることになつたので、お類との約束を反古ほごにし、お類はそれを悲しんで自害したのだという噂も伝わりました。

それはともかく、川波勝弥はそんなことは知らぬ顔に、毎日道場にやつて来

て、少し人の好い林彦三郎と共に、門弟たちの相手をしておりました。正月十一日の稽古始めにも、吉例の勝抜一本勝負をやり、見事大原幸内、岸松太郎、林彦三郎の三人を叩き伏せて、優勝をかちえ、心ある者から代稽古ともあるものが、大人気ない——と思われたりしていたのです。

「その晩鱈腹たらふく呑んで、亥刻半よつはん（十一時）頃飯田町の家へ帰るところを、神楽坂の路地の中でやられたんで。こいつは因縁事じゃありませんか。ね、親分」  
ガラッ八の八五郎は説きおわってこう注ちゅうを入れました。

「因縁事じゃそれ程の腕利きを一人殺せないよ。いくら酔っていたにしても、脇差で背中からえぐられるまで知らずにいる筈はない」

平次はもう事件の中へ頭を突っ込んで行きます。

「だから、林彦三郎が一番臭いということになるでしょう。川波勝弥を芋のように刺せるのは、林彦三郎の外にはない。おまけに、その日一本勝負でひどい

負けようをしている」

「それっきりの話なら、わけはないじゃないか。強いと言ったところで、浪人者の一人や二人、縛って縛られないことはあるまい」

「その通りで、手に余るから親分の力を貸して下さいってわけじゃありません。借りたいたいのには親分の知恵の方で」

「お安い御用見たいだが、小出しの知恵は出払ってるよ」

「ね、親分。その林彦三郎は、川波勝弥よりも呑んで、ベロンベロンに酔払って、下男部屋へ転げ込んで、泊まってしまったとしたらどんなもので」

「フ——ム」

「下男の熊吉、——こいつは五十そこそこだが、生れたままの独り者で、尤もまつかわぼうそう松皮疱瘡で二た目とは見られない顔だが、道場の誰れ彼れに聴いて見ると、正直者で通っているということ。この熊吉が宵から林彦三郎の介抱をして、

小用場へまで一緒に行つてやつたと言ふんだから、こいつは嘘じゃないでしよう」

「外には？」

「岸松太郎と大原幸内は宵のうちに歸つて、家から一と足も出ません。五助や柁次は飲み足りなくて神楽坂で一杯やつていたそうだし、困つたことに、川波勝弥を殺しそうなのは一人もありませんよ」

「死骸の側に懐ろ鏡があつたというじゃないか」

「ギヤーマンの懐ろ鏡で、こいつは二朱や一分で買える代物じゃありません。

赤い羅紗らしやの鏡入はきに挟んだまま、死骸の側に落ちて割れていたんですぜ、親分」

「変な声を出すなよ、虫が起るじゃないか」

「捨てられて死んだ師匠の娘、お類わきの業わざとでも思わなきゃこいつは見当もつきませんよ」

「幽霊が脇差を持って歩いて、人間を芋刺しにするのかい」

「悪い流行物だ。はやりもの行つて見て下さいよ、親分」

「師匠の柴田弾右衛門という人は？」

「気の毒なことに、昨日まで床の上に起上っていたが、今朝の騒ぎでとりのぼせたものか、まるつきり正体ありません。おおいびき大軒をかいて寝ている側で二番目娘のお半さんが介抱だ」

「大軒？ そいつはいけない。気の毒だが当り返したんだ」

「可哀想なのはお半さんだ。良い娘ですよ、親分」

「そんなものがあるから、八五郎がいきり立ったんだらう」

平次はニヤニヤ笑いながら、それでも外出の仕度に取りかかりました。

飯田町の川波勝弥の浪宅へ行って見ると、神楽坂から死骸を持込んだばかりのところ、町内五人組の老人たちと、勝弥の友達らしいのが二三人、何彼と世話を焼いております。

家の中の調度も一と通り、裕福らしくはありませんが、そんなに困っている様子もなく、雇人は下男一人、婆やが一人。いずれも近在の者で、給料さえ満足に貰えば、何んの不平なく勤めると言った肌合らしく見えるのでした。

「御免よ」

「あ、銭形の親分さん」

顔を知っているのが多いのは、平次のためには仕合せでした。相手は武家で、町方には苦手ですが、幸い文句を言う者もなく、心そのままに調べは運びます。

川波勝弥は腕前も男っ振りも申し分はなく、少しばかり薄情なところも、若

い女には一つの魅力だったかも知れません。傷は後ろからたった一と突きにやられたもので、一流の使い手の背後に忍び寄って、これだけの業わざをするのは、余っ程胆の据すわった、腕のできるものでしょう。

川波勝弥は、見た人の話によると、右手を一刀の柄にかけ二三寸抜きかけたまま、こと切れていたそうです。

一と通り家の中も見せて貰いましたが、余っ程学問が嫌いだったらしく、史書経書は言うまでもなく、庭訓往来ていきん一冊ないのはサバサバしております。

「八、近所の衆の噂を聴いて見な」

平次は顎をしゃくります。

「散々ですよ。借りは拵える、飲み倒しはする、家賃だって五つも溜たまっていますよ」

八五郎は酔っぱい顔をして見せました。

「女出入りはないのか」

「男前と腕前に自惚うぬぼれがあつたものか、その道には恐ろしく勘定高かつたようで

「女出入りに勘定高いって奴があるものか。お前なんか、勘定低い方だ」

「へッ、違えねえ」

「本人がそう思い込んでいりや世話アねえ」

「尤もつとも柴田の跡取娘を狙つたり、何んとか言う大身に聳入むこいりする話があつたんだから、少しは氣をつけたんでしようよ」

「八五郎だつても、狙つた穴がありや」

「解りましたよ、親分」

「もう少し身が持てるだろうよ」

無駄を言いながらも、平次の探索はピシピシと壺つぼにはまつて行きました。

半刻（一時間）あまり後、何もかも見尽して、川波勝弥が恐ろしい喰わせ者

であつたことまで逐一解りました。

「さア、今度はむずかしいぞ。現場を覗いて、肴町さかなまちの道場へ行くんだ」

「合点」

平次が号令をかけると、八五郎は忠実な獵犬のように飛び出します。銭形流の神速主義でこの事件を一気に片付けようと言うのでしよう。

#### 四

川波勝弥が殺されていたのは、神楽坂の裏道で、滅多に人の通らないところ。死骸を見付けたのは夜が明けてからですが、殺されたのは多分真夜中だろうと言ふことでした。

往來は掃はき清めて、何んの跡も残らず、近所で訊いても少しの手掛りもあり

ません。

平次と八五郎は、いい加減に諦めて、肴町の道場に向いました。

「御免下さい」

平次はお勝手口から腰を低く入って行きましたが、相手はそれ以上心得て、  
「銭形の親分か、さアさア入るがいい。お前が来るだろうと思って、心待ちに  
待っていたよ。土地の御用聞は、幽霊を縛る心算つもりでいるんだから、手のつけよ  
うはない」

そんなことを言ってお迎えしてくれます。二十五六の若い浪人者、これが林彦三  
郎というのでしよう。身体は大きいが、あまり知恵のありそうな男ではありません。  
せん。

「飛んだことでもございましたな、——旦那は林さんと仰しゃるんで」  
「そうだよ、川波氏に昨日手ひどく負けた一人だ」

そんなことを言つて、彦三郎はカラカラと笑うのです。

「先生は容体が悪いそうじゃございませんか」

「それで困っているんだ。半身不自由と言つても、昨夜まであんなに元気でいた人が今日はもう正体もない」

彦三郎の顔はさすがに曇ります。

「ちよいと、御容体だけでも——」

「あ、いいとも。疑念の残らないように、よく見て行くがいい」

彦三郎は、先に立つて、サツサと奥へ入つて行きました。奥と言つても、至つて質素な家屋で、大きな道場を除くと、人間の住めそうな部屋は幾つもありません。ゆうべ林彦三郎が酔つ払つて下男部屋へもぐり込んだと言うのも尤もな<sup>もつと</sup>ことでした。

「お半殿、町方の御用を勤める平次親分が来たが——」

「どうぞ」

物の気はいがして、中から静かに障子を開けたのは、十九か——せいぜい二十歳<sup>たち</sup>とも見える、綺麗な娘でした。去年の秋自害して果てたという姉のお類は知りませんが、妹のお半の美しさと高貴さは、平次もちよつと立ち止ったほどです。



平次は自分の職業的な姿や気持に、妙に浅ましさを感じてそつと一礼して、黙ったまま部屋の中に滑り込みました。

主人の柴田弾右衛門は、五十六七の中老人で、まだ老朽おいくちた年ではありませんが、半歳の病気に蝕むしばまれて、少しむくんだ、鉛色の顔などを見ると、卒中性の躰しんぴきを聞かなくても、人など殺せる容体ではないことは余りにも明かです。

「昨日までは起きていなすったんですね、お嬢さん」

半次は少し尻ごみをしながら訊きました。

「え、昨日まで床の上に起上って機嫌よく話しておりました——今朝起きて見るとこの通り」

お半は涙を吞みます。

「左半身は不自由だと言っても庭ぐらいへは出られたそうですよ」

ガラッ八は町内の医者から聴いた通りを補ってくれました。

「ところで、この道場の跡は、どなたが継ぐことになっていたんでしょう」  
平次の問いは当然の筋道です。

「さア、——私には解りません」

お半はそう言つて、心細くも林彦三郎を顧かえりみます。

「亡くなった川波氏が、これも亡くなったお類殿といっしょになって、この通場を継ぐ筈ではあったが——」

林彦三郎にもそれ以上のことは解らなかつたのでしよう。

「中条流の免許皆伝というようなのは、どなたが譲り受けられるのです」

「——」

お半と彦三郎は顔を見合せたつきりこれも返事はありません。

平次は調子を変えて、

「お嬢さん、ゆうべ何にか変ったことに気がつきませんか、夜中に出た者があるとか、帰った者があるとか」

「いえ何んにも」

「今日は？」

「皆んな一度ずつは出たようです」

これでは何んの手掛りにもなりません。

「死骸の側で割れていたといふ懐中鏡は、平常どこにおいてあるんで」

「お仏壇の中に入れてあります」

後ろの方で、ガラッ八がそつと肩を縮めました。話が怪談がされると、大の男のくせに恐ろしく敏感です。

「林さんは昨夜たいそう酔いなすったそうですね」

「いやもう滅茶滅茶、前後不覚に下男部屋に転げ込んだよ」

「今朝まで、何んにも御存じなかつたのですね」

「面目ないが、その通りだ。本当に水も飲まなかつたよ」

林彦三郎は苦笑いするばかりです。

平次と八五郎はそれつきり引揚げるより外はありません。道場の前を通つて、下男部屋を覗くと、おおあばた大痘痕の熊吉が、庭の掃除をすませ、てあぶり手焙を股火鉢にして、これだけは贅沢らしい煙草をくゆ燻らせております。

「熊吉と言つたね」

「へエ——親分さん方、御苦労様で」

「川波さんが殺されたことについて、何にか心当りはないかえ」

平次は我ながら平凡なことを、平凡な調子で訊きました。

「天道様は見通しでございますよ、親分さん」

熊吉はみにく醜い顔をゆが歪めました。

「それはどう言うわけだ」

「あの方のために、お嬢さん——お類さんは死んでしまいました。若い娘一人を殺して、ろくなことがあるわけはありません」

「ゆうべ、川波さんの帰ったのを知っているかい」

「よく知っております。亥刻半よつはん（十一時）少し廻った頃で、たいそうな機嫌でしたよ」

「それから誰も出たものはないのか」

「犬っころ一匹出ません。表戸はこの私が閉めたんですから」

「裏から出る手もあるぜ」

「裏は宵のうちに閉めてしまいましたよ」

「林さんはたいそう酔っていたそうだね」

「へエ——、ここへ転げ込んで、到頭泊ってしまいました」

「ここでまた飲んだそうじゃないか」

「飛んでもない。ここにはろくな茶もありません」

平次の仕掛けた罍わなは見事に外れました。

## 五

平次はそれっきり引揚げたのです。

「親分、何んだってあの野郎を縛らなかつたんで」

「誰だい」

「下手人は林彦三郎とか言う浪人者に決っているじゃありませんか。あの熊吉と口を合せて、昨夜どこへも出なかつたことにしているに違いないじゃありませんか」

ガラツ八は不平で一パイでした。

「そう判っているなら、戻って縛るがいい。あの林彦三郎というのは、中条流の使い手だ。丸橋忠弥を挙げるほどの手数を覚悟するがいい」

「じゃ親分は、怪我が大きくなりそうだから、見す見す怪しい野郎を放っておくんで」

「馬鹿ッ」

「へエ」

「何んと言う口の利きようだ」

平次の叱咤は峻烈しゅんれつを極めました。十手捕縄を預って、銭形とか何んとか謳うたわれる半次には、相手の腕っ節を恐れないだけの自尊心はあったのです。

「相済みません」

「林彦三郎を縛るには、縛るだけの手順が入用だ。俺はあの男の腕っ節が怖い

んじゃない、——死骸の側に落ちていたギヤーマンの懐ろ鏡が怖いんだ」

「すると矢つ張り幽霊？」

「仏壇の中にある、懐ろ鏡を、林彦三郎が持つて行く筈はない」

「なるほど」

平次が深々と腕を拱くと、それを真似たように、八五郎ももつともらしく腕こまぬを組むのでした。

「もういちど引返して、熊吉の身許と、奉公人たちの様子、林彦三郎とお半の仲を訊いて来てくれ。熊吉が給金を溜めているかどうか、主人父娘に受けが良いか悪いか。それから林彦三郎とお半がどんな心持でいるか。お半は弁天様のように美しいが、彦三郎はあまり美しい男じゃない。が、人間は悪くないな」

平次の独り言を背に聴いて、ガラッ八は引返しました。叱られた腹癒はらいせに、素晴らしいネタを挙げて来ようと言うのでしよう。

その晩、

「親分、骨を折らせたぜ」

ガラツ八がヘトヘトになつて帰つたのは戌刻（八時）過ぎでした。

「どうだ解つたか」

深い思案から呼び覚されたような平次。

「道場や武家屋敷は苦手だ。突っ込んだことを訊くとジロジロ人の顔を見ながら腰の物などを捻ひねくりやがる」

八五郎は足の埃を叩いてにじり上つて、お静の汲んでくれるぬるい茶のどに喉をぬらしました。

「どうしたんだ」

「林彦三郎という浪人者にちよつかいを出して、いずれお半さんとわけがおありでしょう——て言うると馬鹿を申すなッお嬢さんはそんな方じゃない。重ねて

そのようなことを言うかと許さんぞツ、と来た」

「フォーム、よほど手厳しくやられたと見えるな」

「手厳しいのなんのつて、あつしは抜いたんじゃないかと思いましたよ」

「お前の話じゃない。林彦三郎が手ひどく弾かれたというのさ」

「へエ——」

「それから、熊吉はどうした」

「あの野郎は溜める一方、五十くらいに見えるが、実は三十七八だろうと言う話ですよ。四十前で金を溜める気になるのも、あの松皮<sup>まつかわぼうそ</sup>疱瘡のせいでしょう」

「八五郎が溜らないのは、男っ振りのいいせいかい」

「無駄を言っちゃいけませんよ、親分」

「ところで、けさ一番先に外へ出たのは誰だ」

「熊吉ですよ、——それから彦三郎」

「柴田弾右衛門の容体は？」

「悪い一方、町内の本道（内科）も首を捻ったそうで」

「困ったことだな」

「何が困るんで？ 親分」

「下手人は容易に挙がるまいよ。まア、時節を待つんだ」

平次は諦めた様子で、大きな欠伸あくびをしました。

## 六

「た、大変っ」

その翌る朝、疾風の如く飛び込んで来たのはガラツ八のあわてた姿です。

「どうした八、たいがい大変が舞い込む時分だと思つて、その辺を片付けさし

たところだ」

平次はさして驚く色もありません。

「あれ、驚かないんですかい、親分」

「林彦三郎が自首して出たんだろう。それくらいのこととは見透しさ」

「有難いッ、——銭形の親分にも見込み違いがあるんだ。それがなかった日にや、こちとらが助からねえ」

ガラツ八はピヨイと飛んで、自分の額を叩きます。

「何が違ったんだ」

「彦三郎は自首なんかしませんよ、——けさ神楽坂の裏路地で、こんどは下男の熊吉が殺されていたんで、——川波勝弥が殺されたのと同じ場所だ」

「刃物は？」

「こんどは匕首」

「前からか、後ろからか」

「前から喉笛を——突きにやられていますよ」

「解った、——それじゃ大急ぎで、肴町の道場に見張りをおけ。下っ引を何人でも狩り出すんだ」

「合点」

「ちよつと待ってくれ、八」

「へエ——」

「熊吉を殺したヒ首は、死骸の側にあつたんだろうな」

「喉に突つ立ったままですよ」

「そいつは誰のだ」

「熊吉ですよ」

「自分のヒ首で殺されたのか」

「因果な野郎で」

「よし、行け」

「へッ」

ガラッ八は宙を飛びます。平次はそれから一としきり考えて、悠々と身仕度をして神楽坂へ行きました。熊吉の死骸は取片付けて、近所の衆は何んにも知らず、平次はそのまま肴町の道場へ、手繰られるように行くより外に工夫もありません。

「親分」

「何んだ」

遠くの方から声をかけたのは八五郎でした。

「やっぱり親分の勝だ」

「何を言やがる」

「林彦三郎は自首して出ましたよ」

そういう八五郎の声には、得意らしさが、溢あふれておりました。親分の見込み違いを喜びおおせるにしては、八五郎はあまりにも正直過ぎたのです。

「どこにいるんだ」

「神楽坂の番所ですよ」

「よしッ、来いッ」

平次は飛んで行きました。続くガラッ八。

番所には見廻り同心賀田杢もく左衛門、土地の御用聞、赤城の藤八などが、雁字がんじがらめにした林彦三郎を護って、与力の出役を待っているのです。自首して出たと言っても、中条流名誉の遣い手、万一のことを心配しての手当でしょう。それを心から受け容れた様子で、林彦三郎黙々としてうな垂れております。

「お、平次か。よく来てくれたな」

同心賀田杵左衛門は、自分の腕に自信がないだけに、銭形平次の顔を見るとホツとした様子です。

「賀田の旦那、——縄は少し厳し過ぎはしませんか」

いきなり平次の言ったのはこんな言葉でした。

「どうして？」

「自首して出たくらいの林さんです。縄にも及ばないでしょうが、念のためと  
言うなら、腰縄くらいで沢山で」

「だが」

「この平次にお任せ下さいませんか。林さんを縛っただけじゃ、この事件は埒  
があきません。ね、赤城の親分」

平次は赤城の藤八にも賛成を求めます。

「勝手にするがいい。だが、俺は知らないよ」

賀田空左衛門はそつぽを向きました。

平次はその間に林彦三郎を縛った縄をといて、埃ほこりまで払ってやり乍ながら、そこに腰をおろしました。

「ね、林さん。貴方は熊吉を殺したと仰しやるのですね」

「その通りだ」

「何んだってヒ首あいくちなんかで殺しなすったんです。不都合なことがあるなら無礼討ちにしたって構わない相手じゃありませんか」

「ヒ首を抜いて向って来るから、奪い取って突いたのだ」

「返り血はひどかったでしょうね」

「いや、大したことはなかった」

二人はしばらく黙りこくって了しまいました。ほんの幾瞬いくしゆんでん転の間ですが、激しい搜り合いが腹と腹とで行われている様子です。

「川波勝弥さんを殺したのは、あれは誰でしょう」

平次は第二段の問いに入りました。

「それもこの林彦三郎だよ」

「理由は？」

「武士として許し難きことがあった」

「それだけで？」

「それで沢山だ」

「武士として許し難きことがあったのなら、なぜ名乗って果し合いをなさらなかったのです。酔っぱらった者を後らから突いて殺すのも、武士として、許し難いことじゃございませんか」

「――」

彦三郎は唇をくちびる噛みました。一言もない姿です。

「脇差はどうなさいました」

「お濠へ投げ込んだよ」

「鏡は」

「――」

「死骸の側に落ちていた鏡は、あれはどうしたのでしょうか」

「俺は知らぬ、――川波勝弥が持出したのだろう」

「それでお白洲しらすが通るでしょうか」

「――」

林彦三郎はもういちど唇を噛みます。

「八」

「へエ」

平次は八五郎をさし招くと、

「道場へ行つて、みんなにそう言うがいい。林彦三郎さんが自首して出ました、御安心なさいますようにって、——川波勝弥殺しも、熊吉殺しも、林さんに違いいありません。と、こう言うんだ。奥まで通るように、なるべく大きな声を出すんだよ、いいか」

「へエ——」

八五郎は飛んで行きました。さぞ、肴町中さかなに響き渡るように張り上げたことでしょう。

それから一刻（二時間）ばかり、掛り与力、笹野新三郎出役、賀田奎左衛門もくや、藤八、平次などの報告を聴いて、（編注）

「それで相解った。自首して出た林彦三郎は、一応宿元へ引取らせ、家主に預けおくがよかろう」

笹野新三郎も、平次と同じように、林彦三郎を疑う心持はなかつたのです。

「恐れ入りますが、旦那」

「何んだ平次」

「林彦三郎は矢つ張り、下手人としてお引立てになつた方がよろしゅう御座います」

「そうかな」

「あの通り八五郎がぼんやり戻つて参りました。道場へ知らせてやつても、誰も何んとも言わないようじゃ、他に下手人げしゅにんがあるわけはありません」

笹野新三郎は黙つて顔を挙げました。その旨を承うけて、下つ引が二三人。

「立てッ」

林彦三郎の三方からバラバラと取巻きます。

「どうだ八、——存分に張り上げて見たか」

平次はガラッ八を迎えてこう訊きました。

「節分の豆撒きほどに張り上げましたよ。岸松太郎も、大原幸内も、黙って顔を反けたつきりさ。武家なんでもものは薄情だね」

「お嬢さんのお半さんは」

「何んにも言わねえ、お面のような顔をしていましたよ。あの娘は綺麗だが、優しいところのねえ女だ。嬉しそうな顔もしなきゃ、悲しそうな顔もしねエ」  
ガラツ八の注沢山な報告を聴きながら、林彦三郎は淋しく引立てられて行きました。

## 七

それから幾日か経ちました。

「親分、あの一件が、どうも気になってならねえ。どうしたんでしようね、一

体

ガラツ八は変なことを言い出します。

「道場の一件か」

「エ、川波勝弥殺しに熊吉殺し、あれはやっぱり自首した林彦三郎が下手人でしょうか」

「解らないよ」

「あつしは、あの娘じゃないかと思うんだが、——あの娘が、姉の敵討ちの心算つもりで、川波勝弥を殺し、それを知って強請ゆすりがましいことを言うんで、熊吉を殺したんじゃないやありませんか」

「さア」

「林彦三郎は、娘を助けたさに、身に覚えのない罪を背負って名乗って出たんじゃないやありませんか」

ガラツ八の疑うたがいは尤もつともでした。が、平次は、

「あの娘に川波は殺せないよ」

まるつきり取り合いません。

「後ろから不意に刺したとしたら？」

「川波勝弥は余っ程使えたそうだ。一流の達人が、酔っぱらっていたくらいのこと、女子供に一刀で仕留められるものではない——それに」

「それに——」

「林彦三郎がお半の身代りに縛られたのなら、お半が黙っていない筈だ。彦三郎が縛られたと聴いても、お半は驚きも歎きもしなかったのは変じゃないか」

「なるほどね」

感心した所で、ガラツ八には何が何やら見当がつきません。

「林彦三郎は口書くがき拇印ぼいんも済んで、伝馬町へ送られるという話だ、困ったことだ

な」

何にかしら、平次にも鬱陶うっとうしい日が続いたのです。

二月になって、ある薄寒い日の夕方のことでした。

「お客様ですよ、お前さん」

お静は半分目顔に物を言わせて取次ぎます。

「どんな方だ」

「若い、お武家方のお嬢さんで」

「丁寧にお通し申すんだ」

平次はとうとう来るものが来たような気がしたのです。

「親分、道場の一件でしょうね」

「そんなことだろうよ」

八五郎は急に坐り直しました。狭い着物から、膝小憎がはみ出します。

「親分、飛んだ御迷惑を掛けました」

そつと滑り込むように、畳に両手を落したのは、やはり柴田弾右衛門の二番目娘お半です。

「あ、お嬢さん、お父さんは」

「亡なくなりました。——今朝ほど」

「矢っ張り、ね」

「あとあとのことは、門弟衆にお頼みして参りました。私を縛って下さいまし」

「——」

「熊吉を殺したのは私でございます」

「すると？」

「熊吉は、私を誘さそい出して無体なことを申します。最初は胸をさすって帰ろうかと思いましたが、ヒ首あいくちまで抜いて私を脅おどかしますので、ツイ得物を奪い取っ

て――」

「刺したというのですね、お嬢さん」

「ハイ」

「返り血を浴びた筈だが」

平次は一步突っ込みました。

「林様が始末をして下さいました。どこか土でも掘って埋めたことでしょう」  
お半は神妙に言いきって、美しい顔を挙げました。

「川波勝弥を刺したのは？」

平次はそれも聴きたかったのです。

「あれは存じません」

「え？」

「私ではございません」

「懐ろ鏡は？」  
ふとこ かがみ

「あれは私のでございます」

「さア解らない。もう少し詳しく話して下さい、お嬢さん」

「川波勝弥は悪い人でございました。姉が自害したことが世上の噂に上り、大身へのむこいり智入の話も破談になると、今度は、私へ無体なことを申しました」

「なるほど」

お半の美しさを見てみるとそれは全くありそうなことでした。

「あまりのことに手厳しく申しますと、父上の手文庫から中条流の伝授書を出し、この道場を取潰すと申します」

「フーム」

「それはあの晩のことでございます。若し、伝授書が返して貰いたかったら、一緒に来いと言うのです」

「私は兎も角も後を追いました。言われた通り神楽坂の裏道へ入ると、道の真ん中に倒れている者があります。月明りに透<sup>すか</sup>して見ると、川波勝弥の死骸」

「後ろから脇差で刺されておりましたが、見ると、脇差は柴田家のもの——父上御秘蔵の一口ではございせんか」

「私は夢中でそれを屍体から抜き取りました。それから日頃姉上の形見と思つて身に着けておいた鏡——亡き姉上の怨<sup>うら</sup>みの籠った懐ろ鏡を、敵討を果したつもりで、死骸の側に割つて置きました。あの世まで姉を迫わせたくなかつたのでございます」

「その脇差を下男の熊吉に始末させたばかりに、それを種にこんどは熊吉に強<sup>ゆ</sup>

請すられたと言うのですね」

「その通りです、親分」

お半の顔は玲瓏れいろうとして一点の陰影もありません。

「それで判った」

「川波勝弥を殺したのは誰とも判りませんが、熊吉を殺したのはこの私に違い御座いません。このまま私を縛って、林様を許して上げて下さいまし」

お半は神妙に、両手を後ろに廻すのでした。

「もういい、お娘さん。——熊吉を刺したのは、不忠な家来を無礼討になすつたのだ。お嬢さんの罪じゃない。川波勝弥が殺されたのは天罰だ。お嬢さんにも、林彦三郎さんにも罪はない」

「親分」

「林さんは何んとかして助けて上げましょう。お嬢さんは道場へ帰って、何に

も言わずに葬式そうしきの仕度をして下さい」

「親分」

お半は泣いておりました。畳に突っ伏した顔はなかなか上りません。

「八、もう日が暮れたろう。お嬢さんを肴町さかなまで送って上げろ」

「へエ——」

「俺は八丁堀まで行って、笹野の旦那に申上げて、林さんの縄を解いて上げる」  
三人はお静に送られて路地を出ました。

「お嬢さん」

平次は往来に立って牛込の方へ行くお半を呼び留めました。

「——」

「林さんは立派な武士だ。嫌ったりしちや済みませんよ」

「——」

「あの方は、黙って死罪になる気でいた。この恩返しはお嬢さんの胸にあることだ。お解りでしょうね。お嬢さん」

お半は首を垂れた様子です。梅二月、寒い風が吹いて、そうさせたのかも知れませんが。

×

×

「ね、親分あつしはどうしても解らねえ、川波勝弥を殺したのは誰でしょう」  
事件が落ち着いて、お半は林彦三郎を聲に迎えたとき、八五郎は絵解きをせがみました。

「解らないのかえ」

と平次。

「へエ——」

「呑気な御用聞だね」

「お半でなし、林彦三郎でなし」

「もう一人いるじゃないか」

「あ、あの中氣病みの——」

「そうだよ、柴田弾右衛門だよ。中氣が当たったと言っても半歳程前のことで、近頃は庭へも出られるようになっていたんだ。川波勝弥のすることが弾右衛門には門弟ながら憎くてたまらなかつた。それに少しの油断から手文庫の伝授書を奪われ、その上大事の二番目娘お半までおびき出されそうになつたので、死物狂いで追いつがって、脇差で背後から刺したのさ。さすがに中条流名誉の腕前だ、名乗って正面から向つては叶かなわなくとも、後ろからなら門弟の一人くらいは成敗できる。そのまま帰つては来たが、心と身体を使い過ぎて二度目の中氣にやられた」

「なる程ね」

「その後へお半が行って脇差の始末をし、姉の怨みを晴らす心算で、形見の懷る鏡を死骸の側で割って来たのさ。若い娘だから、後に証拠の残ることなどは考えない。あの世とやらへ行つて、川波勝弥と姉のお類の縁が切れなきや困るだろうとでも考えたんだろう」

「――」

ガラツ八も固唾かたずを呑みました。妙に身につまされた心持です。

(編注)

底本では時間を示す「一刻」に「一時間」と注釈をつけていますが、史実に基づいて「二時間」と改めました。

作品中には、身体の障害や人権にかかわる、差別的な語句や表現が見られますが、本書が成立した当時の時代背景等が現代とは異なる古典的な文学作品でもあり、著者が故人でもありますので、底本のままとしました。ご理解、ご諒承のほどをお願い申し上げます。

挿絵―萩 柚月

初出―「オール讀物」昭和十五年二月号 文藝春秋社

底本——「錢形平次捕物全集」第六卷 河出書房 昭和三十一年七月三十日初版

編集・発行 錢形俱樂部



# 錢形俱樂部

<http://www.zenigata.club/>